

洲本大教会(大典分教会)教人 スーザン・サトウ

数年前、教祖殿の東側の階段のところで小柄な老婦人に出会った。初対面である。一見、足元がおぼつかないように見えたので、おさづけをお願いした。

おさづけのお取り次ぎが終わると、「私は涙が止まらない。さあ、お諭しをください。」と急き込まれた。「あなたは嫁さんを泣かしています。」「わたしは、何も云うたりしない。」「目の前では云わないが、陰で自分の息子に、嫁さんの悪口を年中云っている。それを聞いた嫁さんは、いつも泣いている。その涙をもらったのです。」厳しい表情の女性は、凶星だったのか顔を伏せた。

「あんた凄いな。」と述べて、その場を去られた。お取り次ぎをさせて頂く相手は、自分の姿であろう。同じいんねんの人との出会いを、教祖に寄せて頂いたのだ。彼女が私の姿であり、老婆に身をやつした教祖が、私に教えを伝えて下さった事に気づくと、体中に戦慄が走った。自分の癖性分を悟らなければ、人のおたすけなどできない。

自分の心を直すために、理の子を頂き、理の子との係わりを通して、心の中に積み重ねた不要なものを棄てる努力をする。おさづけは人を正すためのものではなく、己の心を正す手段なのだ。教えのお取次ぎは、心に浮かばせて頂いた言葉に限る。その人に向かって出てきた取次人の言葉の中に、神様からのお手紙が込められている。そう信じて、教祖を見失わぬよう、名もない布教師として歩みたい。